

沼津市 若山 水 小 記念館

第一號

1989.3.30.

編集・発行 社団法人 沼津牧水会

〒410 沼津市千本郷林1907-11

TEL (0559) 62-0424



牧水の写真

牧水記念館の展示構想が決まって資料の選択が始まったとき、この仕事を担当していた展示業者のTさんがつくづく言ったことがある。「牧水という人は一生のあいだに自分の写真を随分たくさん撮った人なんですねえ」

確かにそのとおりで、牧水自画像に関してはあらゆる年代について実に豊富に揃っている。高等小学校二年のときの写真から、昭和三年、死の二か月前の写真まで、数えてみると百を超える場所に顔を見せており、そのうち牧水だけの写っているものが二十枚にも及んでいる。(新声社版・牧水写真帳より)

展示業者の素朴なひとことで、このときとつぎに私が思い出した文章がある。昭和四十一年の「現代短歌」に玉城徹氏が発表した「牧水短歌の位相」という論評である。氏はこの中で「牧水にはどうもナルシズムの傾向があったようにわたしには見える」と書いているのだ。

「朝ごとに垢あらひおとしあからひくおのが身体を見るはたのしき」など十二首を抽いたうえで、「牧水がどんなに終始一貫、自分の「ひとみ」や顔や、あるいは肉体の各部分、身体全部に飽くことのない愛着をもっていたかがわかる。」というのである。写真の数の多いことを直ちにナルシズムに結付けるつもりはないが、牧水という人を知る上の一つのがかりであることは確かである。

上掲の写真は最晩年に属するもの、昭和三年一月一九日の日記をみると「朝食後床屋にゆく、その帰り大門堂にて半身の写真を撮る」と記されており、そのときの写真である。

(H)

特別寄稿

牧水と海

高鳴健一

〈川は愈々広くなる。と見ると丁度自分等の前方に長い砂の丘が横たはり、その丘を越えて向うにをりをり白く煙りながら、打ち上がつてゐるものがある。何気なく母に訊くと、其処はもう海で、あの白いの浪だと答へた。海ノ浪ノ私は思はず知らず舟の上に立ち上つた。〉(「おもひでの記」)

七歳の日の牧水の想い出である。母に連れられて長姉の嫁ぎさきの都農町へ、耳川を舟でくだつたとき、牧水は初めて海を見た。その初体験の感動がありありと伝つてくる文章である。さらにこの後、舟が着くか着かぬかに飛び上つて母の留るのもきかず、その砂丘に走つて其処に初めて私は広大無辺の海洋と相対したのであつた。今まで滝や溪にのみつながつてゐた水に対する私の情はその時から更に海を加ふる事になつて来た。とつづく。牧水は、この海への感動を一生持続させた。処女歌集に『海の声』と命名したことも、この幼時体験を抜きにしては考えられないだろう。

白鳥は哀しからずや空の青海のあをにも染まずた
だよふ 『海の声』

海断えず嘆くか永久にさめやらぬ汝みづからの夢
をいだきて

ああ接吻海そのままに日は行かず鳥翔ひながら死
せ果てよいま

ともすれば君口無しになりたまふ海な眺めそ海に

とられむ

君かりにかのわだつみに思われて言ひよられなば
いかにしたまふ

『海の声』冒頭に近いところから五首、牧水二十四歳、青春の歌である。これらの歌の背後に美しい一人の女性——園田小枝子があることは、改めて『別離』に再録されたときに、(女ありき、われと共に安房の渚に渡りぬ。われその傍にありて夜も昼も断えず歌ふ。)と、この一連に詞書がつけられた——ことによつても明らかであろう。切なく甘くそして悲しい一連である。しかし、もう一つ忘れてはならないのは、牧水の〈海〉への思慕である。海を人格化して扱え、その魅力が直接・間接的に歌われている。牧水のなみなみならぬ〈海〉への愛着が、これらの歌を一層魅惑的に行っていることは確かであろう。ちなみに、『海の声』四七七首中、直接海(磯・わだつみ・渚等を含む)が登場するのは約二十%——驚くべき数である。

牧水は生涯〈海〉を歌い続けた。牧水は酒の歌人・海の歌人と言われている。まさにその通りであるが、これに加えて海の歌人と言つてもいいほど海の歌が多い。そして、すこし独断的に言えば、〈海〉の歌にそのときどきの牧水の心境を伺うことができるようだ。

海縁の五月の雲も、わが汽船の濡れしへさきのう

らがなしけれ

『死か芸術か』

わが渡る五月の海に
魚海月、さびしく群
れてさざ波もなし

有明の海のにごりに
鴨あまたうかべり、

船は島原へ入る

『みなかみ』

風も凧ぎゆふべとな
れば有明の海はあぶ
らの如し、憂鬱

牧水の乱調時代の歌、
五月の海も重く淋しく、

冬の有明の海の暗さは
言うべくもない。作品

としても文低く、牧水
の苦衷がそのまま伝つ
てくるようなこの時期

の海の歌である。

大正九年、牧水は沼

津へ移住した。牧水の
生涯の大きな転機とな
つた東京脱出の対象が



沼津であったのは、海への憧れがなかったらどうか。神部孝への手翰にある、(沼津も町中はいけな)と思ふのです、狩野川のほとりか、海の近くか……)と云うことばはそれを物語っていると思う。沼津に来て牧水は富士山を歌い、海を歌った。千本松原の海、駿河湾は、牧水にとってどんなにか懐しく親しかったことであろう。心慰められ、心励まされる存在であったに相違ない。最晩年の牧水の(海)の歌を『黒松』に見てみよう。

大海のうねりの端の此処に到り裂けくつがへり
とよみたるかも
「千本浜の冬浪」
高らかに巻きたちあがり天つ日の光をやどし落

バスを降りると、そこは山路が急に展けたように平坦な広場であった。「牧水みなかみ紀行を往く」バスツアーの目的地暮坂峠である。
草津の牧水宿泊の宿、一井旅館に一泊し十月二十日朝出発して、小雨部落、六合(くに)村を経て左右に標(しるべ)の歌を読みつきながら一時間あまり山坂を連ばれて来た。標高千九十六、峠の左手山側のやや高みに雑木林を背にして牧水の「枯野の旅」の石碑があった。

十年このかた温め続けて来たこの峠にようやくたどり着いた思いに、幻ではないかとそれに向かって私はしばらく佇ちつくした。

午前十時、いくつかのテントが道の両側に張られ、土地の名産などのささやかな出店もあり、どこからともなく次第に人が集まりはじめていた。六十六年前のこの日、牧水が草鞋に越えたこの峠は、思わず声をあげて眺めた滴るような紅葉であった(「みなかみ紀行」が天候不順の今年はその紅葉がいまひとつというところで寂しい。人々は石碑を背にカメラにおさまるもの、紅葉を踏んで

つる浪かも
しぐれの雨いつしかやみて静かなる宵とおもふ
に浪の音起る
「椿と浪」
今宵たつ浪のとよみは高くあがらず地をつたひ
て聞え来るかも

海に落つる夕日のひかり照りたればこの長浜の
冬の寂びざま
「浜辺に住みて」
立ち騒ぐ浪の音かも恙ありていねつつ聞けば真
近き浜に
雄壮な冬の海も、静かな夜半の落着いた海も牧水
はわがものとして受容している。最後の二首は亡く
なる前年の歌である。処女歌集『海の声』自序に、

林の古道を散策するもの、漬物、だんごの出店をのぞくもの、りんご、なめこのみやげを用意するなど、思い思いに旅の心を遊ばせる。

やがて、第三十一回の神前祭の式典(牧水詩碑保存会主催)がはじまろうとした頃は、若山旅人氏夫妻、地元関係者をはじめ、碑のまわりから道を隔てた向こう側に横列に並んだ人々の総勢は三

◆牧水みなかみ紀行を往く◆

暮坂峠の牧水祭

(沼津朝日より転載)

百人余にふくれあがっていた。沼津牧水会の法被を着けた私共四十余名は遠来の客として丁重なもてなしを受けながらの参加である。献酒、枯野の旅詩朗詠、来賓祝辞、若山旅人氏のお話とよどみなく進行し、その声々はめぐりの雑木林へ沁み込んでゆくかようであった。関係者のきめ細い運営のもとに、地味で厳肅な式典は心をこませてお

(悲哀と慰藉を覚えずんばあらず)と、(海)への切ない思いを述べた牧水が、沼津に住み馴れて駿河湾の浪の音を聞きつつその晩年を過したことに、改めて沼津の持つ魅力に思いいたって、私など欣然とするのである。(終)

(たかしま・けんいち)



一九二九年四月神戸市に生まれる。
一九五三年広島文理科大学教育学科(心理学専攻)卒業。一九七八年歌集『方籠』(不誠書院)一九八二年歌集『草の快楽』(不誠書院)刊行。一九八三年同歌集により第十回日本歌人クラブ賞を受賞。
一九七九年静岡県文化奨励賞を受ける。
現在静岡県立大学、静岡女子大学兼任教授。

ひらきとなった。

晴れていた空に雲がわずかに下がり、峠をわたる風が冷えて来た。そのあと保存会のみなさんの心づくしの名物なめこ汁をふうふうと頂きながら牧水弁当に舌つづみを打つ。

常の日は、人っ子ひとり居ないというこの峠に牧水が越えたというその足跡をしのぶべく人々は草津から、六合村から、中之条町から登り来たってこの素朴で厳肅な神前祭を三十一年間も守り続けて来たのである。石碑の上に旅姿で立つ牧水の像は、はじめセメント製であったため、寒さに凍り割れるのを恐れて、神前祭が終わると村の青年達は、大切にコモを掛け縄で結って山を下りたものだという。ここにも牧水に寄せる人々の並々ならぬ思いがしのばれる。晩秋の一日にぎわった暮坂峠もやがて寂しい冬に閉ざされる。神前祭、それは長いきびしい季節の山の魂鎮めの儀式のように私には思われた。

(青木朝子 牧水会理事 下石田)



我等つねに鮮かに生きざる可からず
牧水

明治45年6月29日～7月10日

牧水の日記 ①

「解説」

若山家より委託された資料の中に、まだ牧水全集に発表されていない日記が二冊ありました。一冊は牧水、一冊は喜志子の筆跡で、日付けは二人が新宿三丁目の森本酒店の二階で同棲を始めた直後の、明治四十五年六月以降のものであります。

今回は牧水の日記を原文のまま日付け順に公開致します。これによって牧水における生涯の危機ともいえる二十八才の、明治四十五年六月二十九日から七月十日までの行動は、

手にとるようになっていることが出来ます。

前後の事情を参考のため記しますと、園田小枝子との恋に破れたあとの傷心が癒えず、日々暮しは混沌としていました。四月二日に信濃村井の駅に太田喜志子を呼び出し、突然求婚の言葉を述べて帰京、四月十三日に、石川啄木の死に立ち会っています。五月五日に喜志子は家を出て上京し、同棲が始まります。七月二十日に父危篤の報に接し、喜志子と別れて九州に帰りますが、父の死後一年近く、故郷を出ることは許されませんでした。

六月二十九日

昨日、正午から佐藤君を訪うて、一緒に歌舞伎座に行った。その途中、電車の中で、同君が、また日記をつけ始めようと思つてると云ひ出したので、それでは僕もつけようとすぐ決心した、この頃、ちよいちよいそういふ気がしてゐた所であつたので。続かなかしらすぐ苦笑せられたが、まゝ続くだけでもいいからとにかく始めて見ようと思ふ、出来るなら続けて行きたいものだ。

歌舞伎は思つてゐたほどではなかつたが、きれいであつた。一番心を惹かれたのは我童の「朝顔宿屋」の幕、花やかだつたのは、大切「三社祭」我童、亀藏、菊五郎、猿之助、男寅、児太郎の若手揃に門之助も一寸加つての勇肌の大踊り。

帰りにカフェライオンに寄つて麦酒を飲んでる所へ吉井君が来合せた。イヤ、渋谷から出て来たところだといふ、ライオンで待合せてゐたらしい藝者が

二人、吉井君に黙礼の合圖をしてゐた。

佐藤君と逢ふことは、いつに変わらぬ自分の喜びだ。この人に逢ふのは、飲みたいと思つてゐた酒を少し飲んだといふ心持がする。この人と一緒になかつたら、とても芝居だつて終りまで見てゐられはしなかつたのだ。帰つてみると、留守に佐藤の細君、福永君も来た相だ、福永君には二度るすを食はせた、逢いたひと思ふ。今朝頭が重い、昨夜芝居で冷の正宗を六合、その上に麦酒を飲んだので、宿酔の気味なのだ。弱くなったものだ。午後一時、いま湯から上つて来た。今少し昨夜の記を追加する。

歌舞伎も見た、とうとうこれでみぢめを自分の三つの希望も遂行せられたわけだ。一ヶ月ほど前から私に三つの希望があつた、一は旅行、一は、かばやきを食ひたいこと、一は歌舞伎見。貧乏ないろいろ混雑し窮迫した生活を営んでゐる下に、出来るだけの欲望を満足させて、少しでも自分の生活を豊かに

しようとする努力もなかなか悲惨なものである。このためには、ほんとに蜜柑一つ喰い風呂に入るにさへ、非常な苦心煩悶をすることが多い。午後二時、

とるところ午睡しかけるところへ、山崎君が来た、職業がどうか国へ帰るとか、例の落ち着かなさが特に烈しくなつたやうで、側に居られると、こちらまで、気が変になりそうだ、けふも、午前じつとして居られなくて大森まで行つて来たのだといふ、ぎくろの花と、海岸の石を持って来た、石にはカキがついてゐる、この殻のなかに生きてゐるものがあるのだと思ふと、気味がわるくて、側に置けなかつた、他を云ふわけには行かぬ、自身の心もその通りだ。山崎さ、まったく同情もする。

そこへ郡山君来る。二時間ばかり馬鹿話の末、東雲館の借金のあと始末の話が出た、何だかたいへん辛らつに事が進行しかけて来たやらで、郡山君だいぶ蒼くなつてゐる。またひとつ、黒い蛇が身体に

まきついて来た。

先刻、ぼんやり、兩人の馬鹿話に相手になつてゐながら、急に私は烈しい頽廢した気分になつた、天刑病者のやうな呪咀心、犯罪、入獄、死んだやうな隠栖。貧民窟の長屋。

佐藤が来ると云つたので、切りに待つたが来ない。バンドマン歌劇を見に行かうかと思つたが、誰か知つた奴に逢ひそうでないやだ、と云つてじつとしてはゐられぬ、どうしよう、浅草へでも行くか。郡山君が「悲しき玩具」を持つて来た。あまりにおそまつ製の製本なので、いやな気がした。拾ひ読みに読む。佳いと思ふのはあるが、どうも矢つ張り枯れすぎてゐる、皮一重のへだたりがある、この現在の自分の心などは、どうしても相容れぬ、作品を疑ふ心がまた新たにならうとする。

午後六時の時計が隣りかどこかで鳴つてゐる、空の重い雲にほんのりと赤味がさして来た、向ふの木の葉がそよいでゐる、ああ、山崎でも来ればいい。七月一日

六月廿九日追記、夜は夕方かけてより、更に苦しいものであつた。食ふまいと思つてゐた飯をとうとう食つて、下渋谷の福永を訪ふべく出かけた。留守だらうと豫期して行くと、留守だつた。青山六丁目電車を降りて右へ折込むと、西洋婦人が二人づつ二組帽子をかぶらず、白い衣物を着て、静かにうす闇のなかを歩いて来るのに出逢つた、鬱した心は、すぐあまへる様に、何処か見知らぬ境へ歩んで行く、西洋へ行きたい、せめて、軽井沢へでも。

帰りは、どうしよう斯うしようで、眩みかける頭を押えてとうとう新宿まで歩くことになつた。金を一円二三十銭持つてゐた。飲まうか、飲みたくない、

食はうか、食ひたくない、寄席へでも行かうか、行きたくない。どこのつまりひよいと何か面白い本でも買はうかと思つて、思はず苦笑した、本を買はうなどと思ひ立つたことは、殆ど何年ぶりの現象だらう。青山の練兵場に入り込んだ。八時半過ぎ。暗い夜の斯んな廣い場所は、

——斯う書いてゐると雨が滝の様で、電が光つて、グルグルガラガラをそこで、で鳴つてゐる、七月一日午後四時半もつと鳴れく——

やや、沸立つた心を静かにしてくれたかと思はれた雲が空いっぱいひろがってゐるが、月の夜らしい東京の市街の真上の方角は、灯の赤みを宿して、わるい血を薄くしたやうに雲が沈んでゐる。名のつけられぬ苦悶は深い闇の底に油火の燃えるやうに、また自分の藝術の拙いところに集つて行く。斯う苦しむ時には指さきにほこりのついたやうに、その拙いのが際立つて眼についてくる。アアいやだ、あんな拙いものを作つてゐて、何の甲斐がある、自分の生と、果してどれだけの縁故を保つてゐる……

そして、どうしても藝術といふものを軽視する心は起らないのだ。

塩町二丁目あたりで、櫻栗を買ひ、ぼつりぼつりたべながら歩く。水屋は氷をかき、米屋は米をはかり裁縫師は衣物を裁つてゐる、自分の苦しむとき、自分は心から、彼等市民の幸福を飲み感謝する。

新宿に入つて、二丁目の一品料理屋に入る。今迄気がつかなかったが、アイマイ屋らしい。食ひたくもないものを食ひ、飲みたくなもない麦酒を飲んで、それでも酔つて帰る。

六月三十日 追記
一朝、漸く起きたところへ、山本鼎君来る。案外で



新宿3丁目の森本酒店 (昭和40年頃撮影)

はあつたし、あちこち暇乞に廻らねばならぬといふので、すぐ麦酒を抜き、別盃を酌む。

山本君が佛蘭西へ行くといふことが自分の感情に与ふる影は何であらう。山本君も僕と殆ど同じ様な、目に見えぬ不安苦悶の裡に生きてゐる人らしく見えてならぬ、行つて果して何をしてくるのであらう、目に見えぬものに追はれ、目に見えぬものに引かれ、一瞬をも安ずる能はずして、影のごとくに右往左往する我等一帯の人間をみづからまことに憐れに思ふ。

十二時ごろ一緒に佐藤君所に行く。他に来客多く、話一つ出来ず、山本君に気の毒であつた。三四十分あて、一緒に大木戸まで出て、三方へ別れた。

一九八八年度

『短歌フォーラム』と

『記念館サロン音楽会』の報告

●六月九日(木) 七時

第三回記念館サロン音楽会

「スペイン歌曲の夕べ」

新実真琴 新井さより

●六月二二日(水) 六時三十分

短歌放談

高嶋健一VS上田治史

「きぬぎぬの別れの薄きがやうに立つ泰山木」の一首をめぐる話弾む。

●七月二三日(土) 一時三十分

短歌会 司会 須永秀生

山口静子 幸田麗子 入野早代子

短歌における叙情とはなんであるのか、みんなで考えた二時間三十分。

●八月一三日(土) 七時

第四回記念館サロン音楽会

「イタリアギター室内楽の夕べ」

鈴木輝男 荻生昌平 小楠素弘

渡辺孝子

●八月二四日(水) 六時三十分

短歌放談

高嶋健一VS上田治史

「明治以降の歌の流れについて、多少は承知しておきたい」

●九月二四日(土) 一時三十分

短歌会 司会 須永秀生

山口静子 幸田麗子 入野早代子

「自分の言葉で歌いたい」と、七月にひき続いて好評の歌会、五〇名

●九月二五日(日) 七時

第五回記念館サロン音楽会

マタイ研究会メンバーによる

「弦楽四重奏と歌曲の夕べ」

原田大志 永坂邦彦 林 康夫

寺尾かをり 船田裕子



●一〇月一九、二〇日(水、木)

バスツアー (四三名)

「牧水・みなかみ紀行を往く」

草津一泊(ホテル一井)

清毛白樺美術館・軽井沢高原

文庫・軽井沢高輪美術館
暮坂峠牧水祭参加



●一一月五日(日) 六時三十分

講演 小川国夫

「梶井基次郎と伊豆」

中学生時代に通学の列車の中で読んだ文庫本の「城のある町にて」が、私と梶井との出会いでした。

●一一月二六日(土) 七時

第六回記念館サロン音楽会

記念館開館一周年記念

「花島雅子ソプラノアルバム」

花島雅子 安藤友侯 杉山一郎

●一二月三日(土) 一時三十分

対談 鈴木秋灯VS前田鉄江

「師・牧水を語る」

「牧水の家の庭木は馬力で何度か私が運んだもの、殆ど裾野の木です」

●一二月九日(金) 七時

第七回記念館サロン音楽会

「つのだたかしを迎えてリユート
独奏タウラントの歌曲」
つのだたかし 新井さより

●一月二五日(水) 六時三十分

講演 中尾 勇

「ふるさとの若山牧水」

牧水をめぐる歌の仲間、白秋、啄木との若き日の交友を語る。

●二月一四日〜三月七日

特別絵画展

「絵で見る牧水短歌の世界」

相沢常樹 青木洋子 青島淑雄

志賀旦山 高木 俱 長沢脩而

武藤セイ子 ほか十一名



●三月五日(日) 一時三十分

「雛の歌会」

玉城徹 阿木津英

地方歌壇では耳慣れない本音辛口の
本格批評に、参加者一同恐縮低頭。